端倪すべからざる国

メディア・ウォッチャー、フランスを見る

河村雅隆 著　文芸社　1400円＋税／217ページ

profile

かわむら・まさたか
名古屋大学大学院教授。1951年生まれ。東京大学経済学部卒業。NHK入局。主にNHK特集を制作後、報道局特報部などのチーフプロデューサー、国際放送局国際編成部長、NHKエンタープライズ国際事業部長などを歴任。2010年から現職。

02

一見矛盾に満ちた発想・国柄はどこからくるのか

評者　東洋大学経済学部教授　**中北 徹**

本書は言語文化の角度からフランス社会の変容に焦点を合わせ、放送と政治との距離・関係について幅広い考察をしている。著者はNHK出身で欧米駐在の経歴を持つベテランのジャーナリスト。

フランスは第2次世界大戦で早々にドイツに敗戦したのに、米国の支援を受けて戦勝国、さらに国際連合の5大国に列し、その一方で独自性からNATOを脱退して、本部をパリから「駆逐」した。最近でも、クリミア併合をめぐる対ロ制裁でブレーキをかけながら、土壇場で全面制裁へと転じた。身の翻しが鮮やかでまさしく〝端倪すべからざる〟政治大国なのだ。

強靭で、一見矛盾に満ちた発想や国柄はどこからくるのか。大戦中、ドゴール将軍が亡命先ロンドンからラジオ放送で祖国救済を訴え、信任と求心力の起死回生に成功したというレジスタンスの共通体験がある。米国のみによって解放されたのではないという牢固たる意識が、徹底した自由の気風、多様性重視の考え方を生み出している。

「放送を支配する者が政治を支配する」という確信（テレクラシー）があり、1980年代に当時のミッテラン大統領が民営化を決断するまで、放送は国営のみだった。国家主導でエリートたちが経済や社会をリードするという傾向が強い。

スイスやベルギーなど近隣国の放送で異質の情報が流入することに寛容であったり、新右翼の政党本部への潜入ルポ取材が司法権を巻き込んで国論を二分したり、左翼政党がイスラム難民に傾斜してユダヤ系市民の代表政党がなくなるなど、懐の深さを見せながら、社会は今さまざまな苦悩に直面する。

日本で今後顕在化、先鋭化する課題を含み、フランスは近未来の日本を議論するうえでも重要な参考素材になりそうだ。

03

感情を整える アドラーの教え

岩井俊憲 著

大和書房
1400円＋税

アドラー心理学における「感情はすべてコントロール可能」を基本にした助言集。まず「怒り」では怒鳴ったりしかりつけたりせずに注意を与えるよう心掛けよ、自分の信念を緩めて怒りの感情をコントロールすべきとされる。次に「不安」に対する準備活動としては重要度と緊急度の優先順位を意識し、どうするかを確定することが基本だと。「嫉妬」については嫉妬している現実をまず認め、疑惑を点検し、建設的に対応することが推奨される。

さらに「憂鬱」は自分を責める完璧主義者がなりやすい。ならば目標を引き下げることでコントロール可能だと。最後に「劣等感」はポジティブにとらえて努力を生むうえで生かせる感情らしい。具体例が単純なきらいはあるが、対応の方法一つで感情は凶器にもなれば前向きの力にもなることなど、感情的な人には大いに参考になろう。なおアドラーがコントロール可能と考えたのは感覚や気分を除く情動の感情である。（純）

04

福島第一原発廃炉図鑑

開沼 博 編

太田出版
2300円＋税

本書は、東京電力福島第一原子力発電所の「廃炉の現場」を正面から記録しようとする試みの第1弾。「マイナスの好奇心」を示す一般の人々の「プラスの好奇心のスイッチ」を入れようと考え、疑問が浮かんだらまず開いてもらえるものとして、図鑑風に現状がまとめられている。

編者らは言う。「福島について考えることは、世界と日本の現在を考えることだ。福島第一原発（1F＝いちえふ）を考えることは、私たちの家族や友だちの未来を考えることだ。私たちは考えることを放棄してはならない」と。

事故から5年が経ってようやく一般民間人が廃炉の現場を調査することが可能になったようだ。長期の廃炉の作業でその周辺地域はいかなる未来に向かっていくのか。それに対していかなる理解と想像力を持って向き合っていくべきか。民主主義のあり方や、原子力に対する社会的包摂の仕組みづくりが試されていると、本書は強調する。